

「能海寛の『空』」

タイトル	「能海寛の『空』」
著者名	植田義法
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第23号
ページ	60-64
発行年	2018.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大蔵經の經典を求め英訳經典世に出ず目的で当時鎖国中であったチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

能海寛の「空」

能海寛研究会会員 植田義法

はじめに

山の谷間で生まれる論理Ⅱ（石峰20号）でつぎのように記した、「六方格子において e 、 π 、 i 、自然数、そして龍樹の中論で言う「空」を連想させる s （空のサンスクリット語の頭文字）が同一論理で同時に登場する。」そこの空は論理において当然、「周りと関係しながら自立する個別の個々」に属する空である。この「空」とはどのようなものか、般若心経で教える「空」、数学のゼロに相当するとされている「空」、形而上学的な思考方法によらず、私を含めた下層の庶民が教えられて感覚で捉える「空」、「空とはなにものであるか」おぼろの姿が本文で見えてくる。ここには能海寛がふれる「空」についての見解が“さいごに”重要であった。また、本文末にあげる中村元（能海寛研究会 初代学術顧問）の附言は、「山の谷間で生まれる論理」を進める過程をとおして“標”であったことをあげておく。

（1）個別の「空」

能海寛が中国において、探検行程の途中でチベット文の「般若心経」を直訳した邦文の般若心経（能海寛遺稿）からつぎの部分を引用する、

[玄奘訳]	[能海寛 チベット文直訳]
舍利子	舍利子
色不異空 空不異色	色ハ空也空即(其者)ハ亦色也
色即是空 空即是色	色ヨリ亦空其者(即)ハ別ニ無有也
受想行識亦復如是	空其者ヨリ亦色ハ別ニ無有也 是ノ如ク受ト想ト行ト識等ハ空也
舍利子	舍利子ヨ
是諸法空相	是ノ故ニ一切法ハ空其者ニシテ相其者ハ無シ

能海寛訳に“即(其者)”また“其者(即)”としてある括弧は、周りがある「個別の個々」を強調する“しるし”と考える。中村元による「サンスクリット原典からの邦訳」（岩波文庫）の相当部分を引用する。訳され表現されている内容は能海寛訳と“ほとんど”おなじことであろうが、ここでは「個別の個々」が特別に強調されているようには見えない。

シャーリプトラよ

この世においては、物質的現象には実体がないのであり、実体がないからこそ、物質的現象で（あり得るので）ある。

実体がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。

（このようにして）およそ物質的現象というものは、すべて、実体がないことである。およそ実体がないということは、物質的現象なのである。

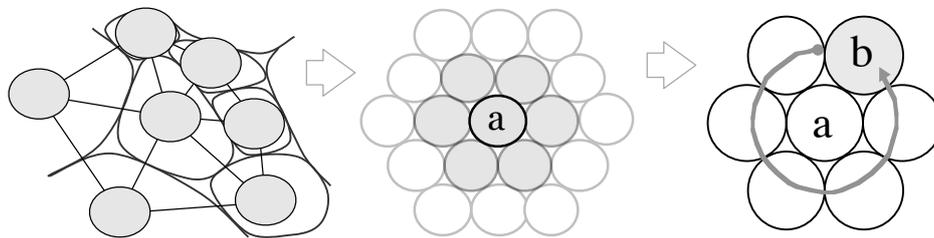
これと同じように、感覚も、表象も、意志も、知識も、すべて実体がないのである。

シャーリプトラよ。

上の2つの引用文において、個別の個々が強調されているように見えるか否かということは、私の感覚によるもので、般若心経の該当部分解釈をいろいろ比較して考証した結果というようなものではない。周りがあって相関係しながら自立する個別の個々に属する空、前述のsは、この後の論述において重要な役割であり、能海寛はその自然の“法”を認識していたとと言うために、能海寛のチベット文「般若心経」直訳該当部分を引用した。重ねて言えば、能海寛は前述のsの認識はなくても別途、周りがあって相関係しながら自立する個別の個々に属する空であること、すなわち自然の“法”を当然に認識していたと、私は能海寛の遺業から学び、あらためて能海寛遺稿にあるチベット文の「般若心経」直訳を読んだから見つけた、前述の括弧書きを、能海寛の“遺志”と解釈したことにより、山の谷間で生まれる論理（石峰19～23号）で進めたスパース推論の根拠が補強され、その結果、学者でなくても、躊躇なく今後のスパース推論を展開できる。

(2) 縁起と空

縁起と空について、縁起する故に空である、縁起するところに空がある（龍樹：中村元、講談社）というように説明されている。山の谷間で生まれる論理（1～IV：石峰）で示めしているつぎの図はaの縁起、したがって周囲のそれぞれも縁起することを表している、



$$e = 1 + 1/1! + 1/2! + 1/3! + 1/4! + 1/5! + 1/6! = 2.7180..$$

$$e^p = \exp(p) = 20 + p \rightarrow \exp(\pi + s) = 20 + \pi + s$$

$$[\pi = 3.14159265.., s = 0.00004065..]$$

この図および数式について「山の谷間で生まれる論理」ではつぎのように説明している、

各円板の位置に、その位置にあつて動かぬ「空」があると考え、さらに、まわりの「空」位置との「関係」が回転して繰り返す、その数を5(空位置の数)／(一巡)×4(回：巡)=20(空位置数)、このように考える。そうして得る「もの・こと」がbに集積されてaに移る：同化されると考えれば、まわりの空位置に「いまはない」ことも含めて、指数関数 $\exp(p)$ は関係している状態の単元を表示する。

巡り数4で認知する空の個数20 (count 5, 5+5=10, 5+5+5=15, 5+5+5+5=20) が、中央の円板 a の資源収集で定まり、関係の単元を展開して表示する $20+p$ が方程式の右辺になって矛盾なく方程式が成り立つ。

(3) ゼロと空

ゼロと空について般若心経[註] (中村元：岩波文庫) ではつぎのように説明されている、

空は「なにもない状態」というのが原意である、インド数学ではゼロを意味する。物質的存在は互いに関係し合いつつ変化しているのであるから、現象としてはあつても、実体として、主体として、自性としては捉えるべきものがない。これを空という。

能海寛の前述見解によつて、縁起した現象としての個別の個々に属する空は、上図に示した個々の円板に重なる、このとき数のゼロも円板に重なる、われわれが経験する感覚は個々の空において縁起している現象である。

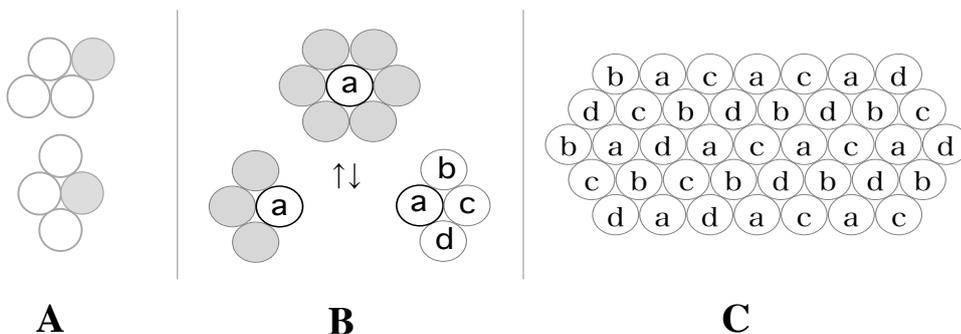
(4) 四元数と空

四元数(しげんすう)は、複素数を一般化したもので、 w, x, y, z を実数、 i, j, k を虚数単位として、 $w + xi + yj + zk$ のように4つの元(要素)が結合した数として表される。

ここで、四元数の4つの元を(2)項のsに対応させて、下の概念図のようにsの0.000040を、大きさ0.00001の4個の円板で表す、ここに円板というのは前図からの流れで、同一の論理に取り込む必要のためである。こうして四元数sとなる。

(4) 空の広がり [四元数の元]

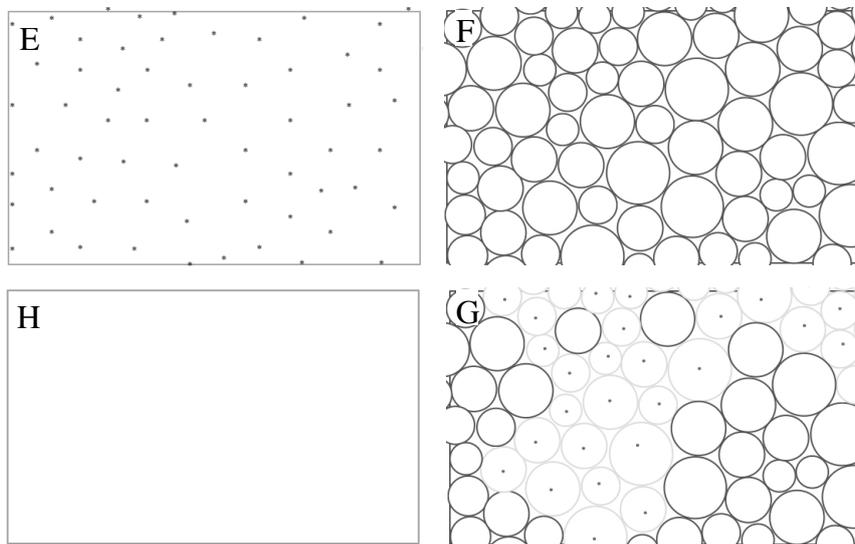
四元数の4つの元の結合、複素平面上での四元数のあり方を概念図で示す。



概念図のAは、四元数をつくる元の4個の円板が結合した様子を示しており、実数元の円板は濃色、虚数元の円板は白色にしている、円の境界は実線だがこだわらない。概念図のBとCは「山の谷間で生まれる論理」からとる、つまり円板となれば四元数にも「円の六方格子配置」論が適用できるということである、Bは円板4個の配置は六方格子配置を作る片側の配置であることを表し、Cは円板4個の自由配置は四色定理に対応することを表す。

(5) 空の広がり [四元数 s]

四元数は4個の元からなる、その四元数 s は「縁起する故に空である、縁起するところに空がある」というところの空である。空の配置は縁起したものの配置に重なる。したがって「山の谷間で生まれる論理」に従い下図を得る。



縁起したものを円板、空である四元数 s を小さい黒点で示している (E)。円板は空である小さい黒点に重なる (F)、該当する円板がないところもある (G)、黒点も円板も現れない、縁起したものは無、空である四元数 s も無となる空白 (H)。

さて、(2) の方程式に示していることにしたがえば、

- ・縁起する内に四元数 s がある
- ・四元数 s において縁起する π
- ・ π が円板(面積)なら s に結合する
- ・ π が円周なら s を含まず唯関係

つまり、あるのは (E) (F) (G) であり、(H) 縁起したものは無、空である四元数 s も無となる空白、ということにはならない。

空とはなにものであるか、おぼろの姿が現れたようである。姿が現れたところで、「空」はコントロールされうる、また偏向を受けた「空」において縁起する浮世であることが、仏教の不信心者にも明らかになろう。そして、いかにその偏向を修正するか、大乘仏教は解答を持っていることも明らかになろう。

中村元（能海寛研究会 初代学術顧問）の附言、引用元：中村元選集 第4巻「チベット人・韓国人の思惟方法」1989 春秋社、付篇三「チベット探検の先覚者・能海寛」。

〈附言引用1〉

「日本人としては最初にチベット探検計画を立て、チベットの近くで死没し、またチベットの文物を日本に最もはやく伝えた人という意味で、〈最初のチベット探検家〉と呼ぶことができるであろう。能海寛は『世界に於ける仏教徒』という書を明治26年11月に自費出版し、東京、京都で刊行しているが、かれはその書の一節に、『西藏國探検ノ必要』を強調している。」

〈附言引用2〉

「さらに彼が探検家であったことと表裏の関係にあるが、われわれが今日ますます耳を傾けねばならぬのは、かれの提唱した〈新仏教徒〉の主張である。」

かれの思想は明治中期のものとしては断然新しかった。従前の世界において諸宗教が戦争をひき起こした事例が少ないことをあげ、真の平和を実現するためには、仏教の真精神を明らかにすべきであるといい、「新仏徒」の運動を提唱している。それは当時の新しい思想と対決しうるものでなければならない。『学者識者ヲシテ仏教ノ真理ヲ了解セシメント欲セバ、哲学上ヨリ弁明スルニ如カズ。』そこで『釈尊ノ正伝ヲ探求スル』ことをめざす。そのために「比較仏教学」なるものを提唱し、サンスクリット原典を研究するために梵学を振興し、諸々の『仏教国ノ探検』をなすべきである、と主張する。